

3

関東甲信越ブロックのHIV医療体制整備

—北関東甲信越ブロックのHIV医療体制—

分担研究者 茂呂 寛

新潟大学医歯学総合病院感染管理部 准教授

研究要旨

ブロック内の調査の結果、首都圏への症例の集中が改めて確認された。長期療養に伴う課題として、歯科診療、腎機能のフォローアップ、生活習慣病のコントロール、メンタルヘルスの管理、リハビリテーションの充実、悪性疾患のスクリーニングなどへの対応が求められている。ブロック内では、こうした課題の情報共有に加え、人材の確保と育成を進め、診療体制の堅持と発展を図る必要がある。また、コロナ禍を受け、HIV感染者をいかに新型コロナウイルスの感染、重症化から防ぐかが重要な課題である。

A. 研究目的

関東・甲信越ブロック内において、HIV/AIDS診療に必要とされる基礎的な知識の普及を図り、医療水準の向上に結び付ける。さらに、医療機関同士の連携を強めると共に、長期療養時代を見据え、拠点病院以外における症例の受け入れ体制を整備する。

B. 研究方法

1) HIV/エイズ症例の動向と診療実態の把握

関東・甲信越ブロック内におけるHIV/エイズ診療の実情を把握する目的で、エイズ治療拠点病院の122施設を対象にアンケート調査を実施した。調査期間は平成31年4月1日から令和2年3月31日までの1年間とし、調査項目としてはHIV感染者/エイズ患者の受診状況について、受診者数（HIV感染者及びエイズ患者実数）、新規受診者数、血液製剤由来患者数、性別、病期、C型肝炎合併の患者数と治療の状況を対象とした。

2) HIV/エイズ診療体制の均てん化への取り組み

中核拠点病院連絡協議会、医療従事者を対象とした講演会、研修会、検討会を企画・開催し、人的交流と共に経験と知識の共有を図った。さらに、各都県で中核拠点病院を中心にHIV診療水準の向上を目的とした啓発及び教育活動を進めた。

3) HIV 基礎知識の啓発活動

一般層を対象とし、HIV感染症に関する最新知識の普及と早期発見に向けたスクリーニング検査の促進を目的に、各自治体との協力の下で、地域毎の特性を活かした啓発活動を企画した。

(倫理面への配慮)

アンケート調査の実施、臨床研究、講演会や検討会での症例提示にあたり、匿名化を徹底するなど、個人情報保護に十分な配慮を行った。

C. 研究結果

1) HIV/エイズ症例の動向と診療実態

エイズ治療拠点病院123施設に対するアンケートの回答は121施設より得られ、回答率は98.4%であった。アンケートで回答が得られた範囲において、ブロック全体での全受診者数は13,878例、薬害被害者は260例であった。地域別に見ると、北関東甲信越の受診者数は8.2%に留まる一方、首都圏は91.8%を占め、中でも東京は71.8%と従来に続き一極集中の傾向が確認された。薬害被害者に限定した場合、東京が82.3%と、さらにこの傾向が強く認められた。

2) 会議・講習会・研修会の開催状況

● 関東甲信越 HIV 感染症連携会議

例年7月に新潟市内で開催し、昨年度はコロナ禍を受けて中止となったが、今年度はリモート会議の

形式で開催し、意見交換の貴重な機会を持つことができた。

- 令和3年度関東・甲信越ブロック都県・エイズ治療拠点病院等連絡会議（令和3年12月）

エイズ拠点病院長（管理・運営責任者）及び診療責任者、エイズ診療に積極的に取り組んでいる医療機関の関係者、都県衛生主管部（局）長及びエイズ対策担当者を対象とした会議であり、開催時に新型コロナウイルスの感染状況が比較的落ち着いていたことから、現地開催とWEB配信のハイブリッド形式とした。内容は、1) COVID-19とHIV感染症、2) 厚生労働省からの情報提供、3) 長期療養を支えるリハビリテーションの視点、4) ブロックにおける病院連携とブロック拠点病院の役割、5) 患者からの要望について、の5題であった。

- 第22回 北関東・甲信越 HIV 感染症症例検討会（令和4年1月）

例年は群馬県高崎市で開催していたが、コロナ禍を受け昨年度に続きWebでの開催とした。一般演題では3演題の発表があり、ディスカッションを行った。終了後のアンケートでは、Web会議の形式により移動の負担が軽減されたことを歓迎する声が聞かれた。なお、発表演題の動画については専用のWebサイトを設け、発表者の同意を得たうえで会議の参加対象者に限り閲覧可能な形とした。

- その他、職種別の連絡会議など

看護師の実務担当者による情報共有を目的に、北関東甲信越エイズ治療ブロック/中核拠点病院 看護担当者会議をWeb上で開催した。その他にも、各職種でカウンセラーについては関東甲信越ブロックカウンセラー連絡会議を、ソーシャルワーカーについては、北関東・甲信越地区エイズ治療拠点病院ソーシャルワーカー連絡会議を、薬剤師については北関東・甲信越HIV/AIDS薬剤師連絡会議を、それぞれWeb上で開催した。

3) 地域における活動

例年は新潟県内の拠点病院以外の医療機関を対象に、希望があった施設に医師、コーディネーター、ナースが出向く形で、出張研修を6-10施設/年程度行ってきたが、昨年度は新型コロナウイルス感染症の流行拡大を受け、中止とした。WEBでの開催形式を

とり、事前に希望のあった医療機関に対して、医師と看護師の講演を1セットとし、同内容のものを2回配信した。今回は計7施設より視聴があり、これらの施設におけるHIV感染症の知識定着により、HIV感染症に対する意識の変化と、今後の受け入れが円滑に進む効果が期待できる。

D. 考察

アンケート調査に基づくブロック内の診療状況については、薬害被害者を含め、首都圏への症例の集中傾向が認められた。北関東・甲信越地区では症例数が限られるため、一例ごとに丁寧に対応可能である反面、医療者側で診療経験が不足する懸念がある。このため、症例検討会などを通して経験を共有する取り組みが必要と考えられた。長期療養に伴う課題については、C型肝炎の治療、歯科診療体制と透析医療体制の確立、生活習慣病のコントロール、メンタルヘルスの管理、整形外科領域とリハビリテーションの充実、悪性疾患のスクリーニング、などへの対応が求められている。引き続き、ブロック内の網羅的な状況把握に努めると共に、肝移植や重粒子線治療などの先進治療を、必要な際にオプションとして選択できるよう、症例検討会などの企画でこれらの話題を取り上げることによって、周知徹底を図る方針とした。地域で実効性のある診療体制を構築していく上では、基幹病院以外にも診療可能な施設を拡充していくことが重要な課題であり、行政との連携に加え、HIV感染症を無理なく受け入れられるような社会の成熟が望まれ、医療従事者だけでなく一般層を対象とした啓発活動も重要な課題である。

甚大な影響を及ぼした新型コロナウイルス感染症であるが、日常から社会の仕組みに至るまで様々な面で大きな変化を引き起こしていることは確かである。日常生活に加え、他県との行き来や会合などが大きく制限されることとなり、円滑な議論、連携を進めるうえで、直接対面できることの有り難みが改めて実感される一方で、Web会議が広く浸透することになり、ブロック内で複数の県をまたぐ会合など、移動の負担を軽減できた意義は大きい。今後もこの流れは加速することが予想される。また、感染症に脆弱な立場となる通院中のHIV感染者を、いかに新興感染症から守るかという視点から、院内の感染対策強化に加え、病状が安定している際の電話診療など、長期療養を踏まえた今後のHIV診療において、今回のコロナ禍により、新たな選択肢が開拓された可能性も考えられる。こうした経験の蓄積が、

HIV診療において将来的に貴重な財産となるよう、引き続き取り組んでいく必要がある。

E. 結論

診療体制を維持、発展させていくためには、人材の確保と育成が不可欠である。ブロック内で症例検討会などの機会を企画し、若い世代が研鑽を積める場を用意すると共に、各職種間での垣根を超えた人的交流の場としても活用していく方針が考えられた。HIV診療を担う人材が世代交代を進める中で、原告団及び当事者団体の方々から、直接お話いただく機会を設け、救済医療の原点を再確認する機会を確保していくことも重要な課題である。さらに、今回の新型コロナウイルス感染症において、日頃の活動が制限される面も大きかったが、Web会議システムの浸透により、各種会合を遂行することが可能となった。コロナ禍にあっても、常に最新の情報を更新しながら、課題の把握と対応に継続して取り組んでいく必要がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Yuuki Bamba, Kei Nagano, Hiroshi Moro, Hideyuki Ogata, Mariko Hakamata, Satoshi Shibata, Takeshi Koizumi, Nobumasa Aoki, Yasuyoshi Ohshima, Satoshi Watanabe, Takeshi Nakamura, Sugako Kobayashi, Yoshiki Hoshiyama, Toshiyuki Koya, Toshinori Takada, Toshiaki Kikuchi, Efficacy of the new β -D-glucan measurement kit for diagnosing invasive fungal infections, as compared with that of four conventional kits, PLOS ONE 16(8) e0255172, 2021
- 2) 中川雄真、茂呂寛、川口玲、内山正子、新保明日香、三枝祐美、野田順子、鈴木啓記、柴田怜、張仁美、佐藤瑞穂、菊地利明、医療従事者のHIV感染者受け入れへの不安—HIV出張研修アンケートからの検討—、日本エイズ学会誌 23(3) 113-121, 2021

2. 学会発表

- 1) 青木志門、小泉健、阿部静太郎、袴田真理子、永野啓、柴田怜、青木信将、茂呂寛、小屋俊之、菊地利明. 当施設における肺非結核性抗酸菌症の状況～治療の状況を中心に～. 第118回日本内科学会総会・講演会, 東京, 4月, 2021.

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし